
夢現×

桑原 沁

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢現×

【Nコード】

N4578H

【作者名】

桑原 沁

【あらすじ】

夢現×（むげんくろす）。失踪者の相次ぐ町では、「ドッペルゲンガー」の噂がはびこっていた。消える人間、現れるもう一人の自分。非現実を望んでいた楓もまた、失踪者の一人となる。魔女と、魔女でない人間がいる「異世界」へと落ちていくのだった。

第1話 ドッペルゲンガー

「ドッペルゲンガーを知っているか？」

退屈は罪だ そう思うほどに憂鬱で、憂鬱であるほど退屈であった。

その退屈を感じているのは自分だけではない。その証拠のように、その噂は町中にはびこっていた。

「ドッペルゲンガーに捕まると、そいつは偽者と入れ替わってしまうのさ」

常葉楓の目の前の席に座る男子生徒、麻生は唐突にそんな話を切り出した。次の授業の教科書を揃えている最中だった楓は、麻生の話をそれほど聞いていなかった。

「何のことだ？」

何の話かと聞いたつもりが、どうやら誤解を招くきっかけになった。

「今流行ってるだろ、知らないのか？『ドッペルゲンガー』だよ」
知っているか、と聞いたくせに知らない相手に対してずいぶんな表情をするものだ。怪訝な顔をする麻生から、「なんだ、コイツ遅れてる」という真意を掴み取る。

だがドッペルゲンガーの話を、楓は知らないわけではなかった。ただ聞き方が悪かっただけで。

「知ってるよ。もう何度も聞いた、それ。もう知らない奴なんかいないだろ」

「あれ？ そうなの。楓はそういうの疎いから、知らないと思ってた」

包み隠さず言う奴だ。素直と言うか正直と言うか、馬鹿正直と言うか、デリカシーの無い奴と言うかは自分次第だ。もう少しオブラ

ートに包んだ言い方をしてほしい。

「そりゃ悪かった。……でもその話、不謹慎だろ。あんまり俺は話したくないんだ」

「ああ、失踪者の話ね」

こいつは、本当にはつきりとものを言う奴だ。きつと長生きできない。

失踪者。ここ最近この都会とも田舎ともいえない町で、失踪者が相次いでいる。最初の失踪者が出てからもうすでに一ヶ月がたった。一ヶ月がたっても、最初の失踪者が見つかるどころか、失踪者は増えるばかりだ。警察は何をやっているのだろう。

「ドッペルゲンガーって死ぬ前に見るとか、見た人間は死ぬとか、殺されるとか、色々噂はあるよな」

「でもドッペルゲンガーを見たから失踪したって訳じゃないだろ。そんな話があつてたまるか。大体、何でドッペルゲンガーなんだ？」

「皆さ、言うんだってよ。失踪する直前に『ドッペルゲンガーを見た』ってさ。だからドッペルゲンガー」

そうだった。失踪者には共通点があり、失踪する直前に必ずそういったことを口にするらしい。

楓の友人、失踪した仁井田勝馬は例外として。

「ドッペルゲンガー……ね」

身近に出てしまった失踪者の事件はすでに他人事ではなく、学校内でも失踪者の話することは殆ど禁句のようなものだった。

だがそれを生徒達は恐れる半面、面白がっているようにも思えた。故に「ドッペルゲンガー」の噂はまことしやかに囁かれ、「都市伝説」が流行ってしまったているのだ。彼らは「失踪者」の話を、ただ単に「ドッペルゲンガー」に置き換えて話しているに過ぎない。

結局のところ、皆、現実に飽き飽きしているのだ。

「勝馬の奴、まだ見つかってないのかな」

「失踪者はまだ一人も見つかってないってニュースで言ってる」
それにしあって、友人である勝馬の失踪を憂えないはずのない自

分の前で、そんな話をしなくなつていいのに。麻生のそういった世間体を気にしないところは、むしろ尊敬に値する。

勝馬は確かに目立たない人間だった。必要以上に友達を作らない奴で、だが成績も悪くなければ顔も悪いわけではなく、むしろ美少年という枠に分類されるような人間だった。ゲームや漫画が好きという共通点があつて仲良くしていたが、学校に来ないこともしばしばあつて大した付き合いはない。勝馬にしてみれば一番付き合いのあつた自分ですら、時々忘れることもあつたのだ。

だが失踪した直前から学校では彼の名前が囁かれ、彼のいないところではまるでヒーローのように語られた。ただの被害者だというのに。教師も毎日のようにそれを憂いては、生徒にそれを語る。授業にもまともに出ていなかった勝馬の、何を知っているというのだろうか。

いなくなつてから、人々は憶えになどない勝馬を必死に思い出すとしていた。なんだろう、この矛盾は。

「そっか。早く見つかるといいな」

「……死んでるとか、考えないのか」

「はつきり言うね」

ああ、つい本音が出てしまった。

だが本当のことだ。勝馬が失踪してもう一週間と三日が立った。これほど日がたつとそろそろおかしい。

夜、コンビニに夜食を買いに行ったという勝馬が、朝になつても戻つてこなかったという一週間と三日前。財布と携帯以外何も持たずに出た人間が、そこから家出をするという発想にはまずたどり着かないだろう。仮に誘拐され、監禁されたと考えても、失踪者はもはや数十名。そんな人数を監禁する意味はどこにあるのだろう。

誘拐され、殺されたと考えるのが一番納得できる答えだ。そんなこと誰も言わないが。

「俺も考えてなかったといつたら嘘になるけど」

「やめようぜ、こんな話」

勝馬がもし死んだと分かったら、きっと俺は泣くだろう。だってそれが当然のことだ。

そうしたらきっと、学校の生徒も教師も、今以上に彼を称えるだろう。

嫌だろうな、勝馬。お前は目立つことが嫌いだった。

第2話 一週間と三日の失踪者

夜の闇を照らすのは月光ではなく、街に灯る人工の光だった。

月は雲によって光を遮られ、時々その姿を見せてはまた隠れてしまふ。

とあるビルの屋上に、二つの影があつた。二人はその姿をさらすまいと、頭からかかとまで布を被っており、男か女かの区別もつかない。一人は常人に比べて大きな体軀をしており、身長190センチは軽く超えているだろう。

一方もう一人は布の上からでも分かるように、細身の体軀をしていようだった。大きな影と比べてしまふとその細さが際立つ。

「なあなあ、羅刹さん」

小さな影が言う。声からして男のようだが、まだ幼さの残る声音だ。

「……なんだ？」

羅刹と言われた巨漢は、どうせまたらくなことを言わないのだろうと予想しつつ、しかし無視するとさらにろくなことをしないと知っていたので、とりあえず聞いておく。

「月の光なんて、あつてもなくても同じような気はするけど、なくなったらなくなつたで困るものかねエ」

「そうだなあ。あるに越したことはないんじゃないか。光がないところでは頼りになる」

「……悲しいねエ」

そつといつつも、その男の口の端は弧を描いていた。

「何がだ？」

「何かがなくならないと、そのものの価値がわからないことが、かな」

こいつは凄まじく楽天的な奴だ。「悲観的」なことを「楽観」しているのだ。だからこうして嘲笑わらっている。どうしようもなく狂

った奴だ。

「楽しいねエ。……可笑いねエ」

「……そうかい」

適当な相槌を打つほかない。下手に「何がおかしい？」などと聞けば、この狂人は狂ったように笑い叫びながら、その理由を言うだろう。そんな状況は願い下げだ。

「ああ、悲しいね」

それは一週間と三日前の夜のしたことだった。

++++

そして一週間と三日後の放課後。

「あかね」

楓は、昇降口で靴を履く女子生徒の背中に呼びかけた。

女子生徒は呼びかけに応じて振り返ると、涼しげな顔で「常葉君」と驚いたように言ってみせた。

「今帰るか？」

「そうですよ。誰かさんが掃除をサボるので、電車一本遅れるなあ、これ」

「え？……ああ」

そう言われて、ようやく自分が掃除当番だったことを思い出す。

他の連中も覚えてはいないだろう。

「悪い、すっかり忘れてた」

「しょうがないなあ、明日来なかったら何か奢ってよね」

おどけるこの女子生徒は、西園寺あかねさいおんじ。ひらがなで「あかね」だ。腰まで届く長い髪が特徴的で、切り揃えられた毛先が清楚さを感じさせる。

「行くよ、行く行く。そういえば部活は？」

「今はさ、ホラ、あれでしょ？ 失踪者が出てるからって、早めに

帰るよう言われてるの」

確かに、普段なら7時くらいまで活動している運動部も、そくさと帰り支度を始めている。弓道部に所属するあかねも、どうりで下校が早いわけだ。

それから他愛のない話を続け、あかねと帰路を共にする。遠い学校に行くのが面倒だという理由で地元の高校にした者同士である。近所に住んでいるわけではないが、途中まで方向は一緒だった。

あかねは可愛い。小学校からの幼馴染であり、彼女と初めて同じクラスになった時からそう思う。実際美少女であり、自分の欲目なしにも、誰に聞いても可愛くないとは答えないだろうと思っている。昔から何度も男子に告白されているのにも関わらず、断り続けている理由を詳しくは知らない。聞くと、「好きになれない」と結構冷たい答えが返ってくる。振られた男子には聞かせられない。

恋愛感情を抱いていないといえば嘘になるが、「好きになれない」と言われるのが恐ろしく、小学3年に会ってから現在高校2年までの8年間、一度も想いを告げたことは無い。大した破壊力である、その言葉。

お互いの帰路の分かれ道に差し掛かったところで立ち止まり、あかねは唐突に疑問を投げかけた。

「ねえ、仁井田君でどんな人だったの？」

「それは好奇心で聞いているのか？」

彼が失踪してから、彼のことにについてよく聞かれることがあった。もうその質問にはうんざりしている。

それにしても、あかねまでその「失踪者」の話をするのか。別に咎める気はないが、よくそんな話ができるな、とは少し思う。世間的に、という話だが。

「そうね。話したことがなかったから」

「別に、何てことない普通の奴だったよ。普通。ほんとに。とりとめて言うこともないくらい」

特に秀でているということもない。顔がいいことをあまり自覚し

ていない奴ではあったが。

「そうよね」

「どつという意味だ？」

「皆が、仁井田君のことをすごい人みたいにいるから。ただ知りたかっただけ」

「何も知らないんだよ。知らないから言える」

「常葉君は知ってるの？」

「よく知らない。でも他のやつよりは知ってる。……ような気がする」

こんな暗い話をあかねとしたいわけではない。そう思って明るい方向に持っていこうとし、皆が面白がって言っている「ドッペルゲンガー」を思い出す。

「失踪者が皆ドッペルゲンガーを見たって話、変だよな」

だが、予想に反してあかねの反応は悪かった。顔は平然としているが、冷たく、

「面白がってるのね」

と言った。

「俺が？」

「あなたもよ」

「……………」

その言い方からすると、俺はあの大多数の不謹慎な連中と一緒に、という意味だろうか。

だが否定も肯定も、どちらもすることはできなかった。自分は結局現実に飽き飽きしていて、身の回りで起きている事件に少なからず期待している。非現実をもたらしてくれると。

ドッペルゲンガーがいたらいいと思っている。子供が夢を見て何が悪いのか。体のいい現実逃避を見つけた。

そういえば、勝馬は現実逃避に溺れていた。ゲームや漫画の世界に没頭し、現実での自分の世界を捨てていた。類は友を呼ぶ。自分も例外ではない。現実なんて、つまらないと思っている。退屈は

罪だ、そう思っている。

「でも常葉君が仁井田君の失踪を悲しまなきゃいけないなんてことはないよね」

「そうか？ 普通逆じゃないか」

「心の問題だよ」

「今日のお前は、何だか刺々しい言い方をするな」

「うん」

否定しない。ここにきて、背中からざわつくような気がした。ざわざわする。落ち着かない。嫌な予感がする。

「明日、掃除ちゃんと来てよね」

「……どうしたんだよ」

「私、明日掃除に行けるかわからないから」

「……………どうして」

聞いてはいけないような気がしたが、聞いてしまった。踏み入れてはいけないような気がしたが、踏み入れてしまった。後悔先に立たずというが、聞く前から俺は後悔していたような気がする。

だってこのあかねの表情を試みる。

「私ね、私のドッペルゲンガー、見ちゃったの」

冬に突入せんとする、秋の風が吹きぬけた。

「……嘘だろ？」

あかねは答えず、緩やかに微笑む。その笑顔は「嘘だよ」と言っているようでもあり、その答えを拒否しているようでもあった。

「それじゃあね」

手を振り、続く一本道へ小走りに去っていく。

楓はそれ呼び止めることもなく、ただ呆然と立ち尽くし、あかねの背中を見送った。

そのときの俺に何ができるわけでもないとは知っていたからだ。あかねが失踪するわけがないと、信じてやまなかった。嘘だと思っていた。

明日にはきつと、窓側最後尾のあの席に座っているはずだ。

第3話 墜落

翌日、窓際最後尾のあの席に、あかねの姿は無かった。

西園寺あかねは失踪した。それも実に不可解な形で。

あかねは他の失踪者と同じく、失踪する直前に「自分のドッペルゲンガーを見た」と言い、そして消えた。

だが、彼女は家に帰ってからどこにも外出はしていなかった。帰宅して部屋に行き、夕飯時になっても降りてこなかったという。母親が彼女の部屋に行くと、読みかけの本がページを開いたまま机に置いてあり、そして彼女の姿はどこにもなかったのだった。

荷物も部屋に置いたまま、靴も一足も欠けていない、どこにも出掛けていない、しかし彼女は消えた。窓の鍵も施錠されていたにも関わらず。

この話は、夕べ心配になってあかねの家に電話を掛けたとき、母親から説明してもらったことだった。あかねの携帯は、その前から音信不通だった。

「……ありえないだろ」

点滅する街灯に蛾が群がる真夜中、楓は言った。

人気の無い路地裏に、楓と麻生は身を潜めていた。

「本当にドッペルゲンガーの仕業かもな」

「面白がるなよ」

咎めるように言う。あかねが失踪してから、あかねの言う「面白がつてるのね」という言葉の重さが分かった。気分のいいことではないだろう、自分が失踪するかもしれないのに。

「……悪い、そんなつもりじゃ……ないわけないか。でも不思議というか、どう説明したらいいんだ？ こんなこと」

「わからない……」

「西園寺は失踪前にお前に言ったんだろ？ ドッペルゲンガーのこ

と」

「言ったさ。でも勝馬のときは何も聞いてなかった。誰もドッペルゲンガーの話なんて聞いてない。そんな話、全部が全部そうだってことはない。ただ何人かが言ってるだけだ」

だから違つと信じたい。そんな非科学的なものに巻き込まれているのだとしたら、自分には何も出来ない。どうしようもない。

何も出来ない？

あかねの背中を黙って見送った時の感覚を思い出した。

いや、有り得ない。

「何にせよ、これで何か分かるかもしれないよな」

「ああ」

楓と麻生は、それぞれ武器になるものを所持していた。楓は野球のバッド、麻生はたまたま持っていた傘。

二人は放課後から現時刻まで、ずっと街を徘徊していた。自分の「ドッペルゲンガー」とやらの会うために、もとい、犯人に自ら遭遇するためである。

自分も失踪者の一人になればいい。そうすれば全ての真相が分かる。

だが、こうした事件が起きていることで警察の巡回がないわけもなく、二人はこうして身を潜めるように街を徘徊していた。

「なあ、いいのか？本当に」

「お前こそ俺に付き合わなくなつていい」

「いや、そんなこと言われてもな……一応ちゃんと心配なんだよ」

「今一伝わらないな、それ……」

「相手が一人じゃなかったらどうするんだよ。それにお前から今日のことを聞いておいて、それでお前が失踪でもしたら後味悪いだろーが」

「まあ無策だけどな」

これで事件の犯人に出くわしたら、何の抵抗も出来ずに自分も失踪者の仲間入りを果たすかもしれない。だがそれでも知りたかった。

あかねを誘拐した犯人を。

何故あかねが失踪しなくてはならなかったのか。何故あかねなのか。あかねはどこへ消えたのか。どんな奴があかねを失踪に追い込んだのか。そして、どうやってあかねは失踪したのか。全てを知りたかった。

我ながら現金な奴だと思う。仁井田勝馬の時、自分は何もしなかった。何もしようとは思わなかった。それなりに付き合いのある奴だったが、自分の身を危険に晒してまで何かをしようとは思わなかった。あかねだからこうした。だが俺は卑怯なことに、犯人を見つけあかねを救い出せたとしたら、勝馬もきつと助け出せると思っている。本当は、あかねのことしか考えていないのに。

冬の近づく寒空の下では、夜が長い、闇が深い。点滅する街灯は闇を照らすにはあまりに頼りない。

「おやおや」

若い、男の声が闇夜に響く。

驚きよりもまず、寒気が背中を伝った。何故ならそれは楓と、麻生の背後から聞こえた声だったからだ。そこから聞こえることなどまず有り得ないという場所から。

「こんな時間に夜のお散歩かい？ あぶなっかしいねエ。こんな時に？」

「……！」

行き止まりであるはずの場所に、唐突に人影が現れた。今さっきまで気配も物音もなく、そこに現れることなど不可能な場所に、唐突にだ。

「いけないよオ、お前も『失踪者』の一人になっちゃうよ？」

そういつて笑う男は、頭の上から布を被り、顔どころかその全貌を見せようとはしない。強盗犯が顔を隠すのと同じで、見るからに妖しい雰囲気漂う。いや、その男が持つ雰囲気そのものが異様と

いっしょにいかないのだが。

「余計なお世話だ、ほっといてくれ」

「心配してる相手に大そうなことを言うねエ。生意気で結構」

男はそこで言葉を切り、そしてまた面白おかしそうに言葉を紡ぐ。
「でも長生きはできないねエ。殺されちゃうよ？ ああ、俺にね」

そういつて、背中に担いでいた大剣を地面にズシンと突き刺した。
その重低音からして相当な重さだろうが、その大剣を携えた腕は自分とそう変わらない細腕だった。

その異様な風体と、異様な言動。かもし出す雰囲気ですでに常人とは違う。

危険信号が頭の中で点滅し、本能が目の前の男を拒んでいる。危険だと訴えている。足元から栗立つ。

「だ、誰なんだお前……！？」

麻生が半ば叫ぶように尋ねると、男は「ハハッ」と軽快に嘲笑^{わら}つた。

「ドッペルゲンガー？って奴？」

「……何言ってるんだよ、本当にそんなのがあると思ってるのか？」

「さア？そんなの俺は知らないね。お前らが言ってることだろオ？」

「あるわけないだろ……そんなこと！ あるわけないんだ、ドッペルゲンガーなんて」

「頭が固いやつだな。流石はトネリコ・ルガンスの片割れだなア。あいつにそっくりだよ」

「トネリコ……？」

聞いたこともない名前だった。だがこれをデジャヴと言うのだろうか、聞いたことなどないはずなのに、その名前を知っているような気がするの。トネリコ・ルガンスの名前を。

「なあ、失踪者がどこに行ったか知りたくないか？教えてやろうか？なあ、なあ？」

楓の質問には答えず、しかし何かを知っているふうに男は言う。

「お前……お前が犯人なのか！？この事件の、」

「全部がそうとは言わないけどねエ。昨日お前と一緒に歩いてた女は、俺が『落とした』んだけどな」

「あかねを……！？……お前が！」

「この野郎！」

言葉の意味は分からなかったが、この男があかねを失踪させるに至ったのだということは分かった。

麻生は感情を爆発させ、男に跳びかかった。いや、麻生は怒りに任せてそうしたわけではない。「怖かった」のだ。目の前にいる男が。

だが、男は麻生が振り下ろす傘をひらりと避けると、何の躊躇いもなくその顔面に蹴りを入れた。

顔面に蹴りだぞ？その動作に一切の手加減が無かったのは言うまでも無い。

「ぐっ！」

「麻生！」

麻生の体は、人間の体はこうも簡単に吹っ飛ぶものかと思うくらい簡単に、蹴り飛ばされ壁にぶち当たった。

男は蹴り飛ばした相手に罪悪感のカケラすらないようで、ずり落ちる麻生には目もくれなかった。その代わりに視線がやってくるのは、楓のほうだった。

バッドを握る手が震えていた。それでも人間の防衛本能が働くのか、楓は知らず知らずのうちにそのバッドを構えていた。

だが、それは相手を楽しませたのか、それとも怒らせたのか、バッドを握っていた手が一瞬にして弾かれた。両手で握っていたバッドが片手で弾かれたただけだというのに、その衝撃は予想していたものを遙かに超え、弾かれたバッドは壁に突き刺さった。

それを目で追う余裕すら与えず、男は楓の首を掴み壁に叩き付けた。

「オイオイ、勘違いするなよ。俺がまともに戦って勝てる相手だと思っつな。お前と俺との間には、圧倒的な力の差が存在する。蹴り

殺すくらい簡単になア。それとも何か？殺されたくって仕方ないのかな、トネリコみたいにな……」

「俺はそんな奴知らない……！」

首を鷲掴みにする腕を引き剥がそうとするが、驚くことにびくともしない。少しぐらい動いてもいいものだが、この男の腕力では首の骨をへし折ることなど容易だろう。

「知らないだろうともさ。だけど知ってる。あいつはお前だからな。なあ知ってるか？トネリコは正義感に溢れる典型的な『正義の味方』って奴でさア、『悪』を許せないんだってよ。勝てるはずも無い俺に何度突っ掛かってきたか知れないね。いい加減鬱陶しいんだよ……こっちのお前を殺せば、あっちのお前は死ぬのかな？試してみたいなあオイ」

「……………ッ！！」

言っている意味は相変わらず分からない。だが、この男からは純粹な殺意を感じる。

殺される 戦慄が走った。

「お前を『落とせ』とは言われてなかったなア、そういえば。まあ殺していいとも言われてはいないけど、止められてはいないから問題は無いよな？ なあそう思うだろ？」

「なっ……………な、何が……………何で俺が……………」

「殺されなきゃいけないかって？」

男は俺の言葉の続きを摘み取った。この世で最も残酷な人間は、目の前にいるこの男ではないかと錯覚するほどに、この男は残酷だ。「そんなの自分で考えるよ。俺は教えてやらない。でも俺には教えてくれよ？お前が死んで、トネリコが死ぬかどうかをさア」

「ふざけんな！」

「殺す・壊すってことに正当な理由なんて本当はないのさ。常にそれは理不尽なものなんだ。だからお前を殺すことに正当な理由は必要ない。そういうことだから、一回くらい死んでみようか？もしかしたら死なないかもしれないぜ？」

本当に殺す気だ　どんな言葉もこの男には通用しない。最初から見逃すつもりはないのだ。

恐怖が決壊したダムのようにあふれ出す。震えが止まらない。

「……い、やだ……」

搾り出すような声で助けを懇願した。だが、無論男には通用しない。

男はにやりと不敵に笑う。そして不思議なことに、先ほどまで地面に突き刺していたはずの大剣を片手に握っていた。

「じゃあな、トネリコ・ルガンスの片割れ君？」

言うのが速いか　大剣が楓の胴体を貫いた。これだけ大きい剣だ、臓器は一瞬にして使い物にならなくなり、行き場の無くなった血液が外へ噴き出す。この非常時に痛覚はその機能を停止したのか、まったく痛みは無かった。異物が体の中に進入したのは感じるが。

悲鳴を上げる力はごっそり持っていかれ、全身から力が抜ける。

悲鳴の代わりに、逆流してきた大量の血液が吐き出された。足元はもうすでに血の海だ。

乱暴に大剣が引き抜かれると、楓の体は支えを失って地面へくず折れた。しなびた野菜にでもなった気分だった。

「　っは、はアッ……はッ……！」

呼吸が上手く出来なかった。肺が気管支か、とにかく呼吸器官もやられてしまったらしい。ショック死をしないだけ自分を褒めてやりたい。

男は残酷な遊戯に興じ、それはもう実に愉快そうな笑みを浮かべていた。

俺がどうやって死ぬのか、死んだらどうなるのか　多分そんなことぐらいしか考えてない顔だ。慈愛や憐憫、自責の念など一切感じてなどいないだろう。むしろ、そんな感情がこの男にあるのかすら妖しいが。

男はふと、思い出したような顔をした。

「お前の名前、そういうば聞いてなかったなア。なんだって？」

答えられるわけが無い。一秒でも長く生きようと、全身が働きかけているのだ。全く意味は無いが。

「何だ、もう答えられないのか。なあ、冥土の土産に一つ教えてやるよ、聞こえてただけだな」

まだ音は聞こえている。目も見える。ちゃんと生きていたときよりもずっと感覚が鮮明になっているようだった。

早く言ってくれないと、もう死にそうだ。

「俺はカルマ・ファードンス。お前の友達、仁井田勝馬の片割れだよ」

そう男は名乗り　羽織を脱ぎ捨てた。点滅する街灯が男の顔を照らし出す。

「か……っ、ま？」

そいつは確かに仁井田勝馬の顔をしていた。

暗闇の中で残酷なほど不敵に笑う、仁井田勝馬の顔を最後に見て、楓の意識はさらに深い暗闇へと落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4578h/>

夢現 x

2010年10月8日22時30分発行